

英語とわたし、または訳すことと書くこと

谷 崎 由 依

翻訳の仕事をしている。英語から日本語へ、ジャンルはいまのところ小説だけだ。ときどき、どうしてこの仕事をしているのか、自分でも不思議に思う。この原稿をご依頼くださった稲葉芳明先生も、心中では少し意外に思われているのではないだろうか。

稲葉先生はわたしが藤島高校に通っていたころの恩師である。三年生のときにクラスを受け持っていただいた。英語の知識だけでなく、映画や小説、村上春樹のことなど、さまざまな話をしてくださって、刺激を受けたのを憶えている。その先生に、一度、大学に入ったら何を専攻するのかと訊かれたことがあった。わたしの答えは国文学だった。英語は好きな科目だったがけれど、将来それを仕事にするなんて思ってもみなかったのである。

人生とはわからないものだ。それはまったくまっすぐではなくて、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、ぎざぎざの軌跡を描いている。この間に何があったのか、説明するのはなかなか難しい。ただひとつ言えることは、大学に籍を置いた数年間のうちに、海外小説の面白さに取り憑かれてしまったということだろう。

もともとわたしは小説を書きたい子どもだった。そして福井にいたころは、魅力的な言葉というのは日本語のなかにあると思っていた。短歌を作るような高校生だった。けれど大学に入ってから、その枠が広がったのだと思う。ごつごつとしてときに無骨な翻訳文学の手触りが、かつては苦手だったのだけど、いざその壁を乗り越えようと、豊富な物語に魅了された。小説を書きたい大人になったわたしは、じっさいに小説家になって、翻訳よりも実作のほうが本業だが、どちらも頑張ってやっている。書くためには読むことが不可欠であり、翻訳とはこれ以上なく深く読むことにほかならない。

ここまでが前置きだ。長い前置きになったけれど、稲葉先生と高校時代と翻訳と、と考えると、このあたりを抜きにしてはどうしても語れないのである。そのような次第で、じつはわたしには英語について語る資格はないと思っている。わたしの専門は小説であって、そこに入っていくための入り口のひとつが英語で、だから英語

のほうは専門ではない。大学での専攻も、英語とは関係のないものだった。翻訳の作業をしていると、しょっちゅうそのことを痛感する。わたしには英語力が足りていない。最近では大学で教える仕事などもはじめてしまい、翻訳について、ときに英語について、学生たちに教えるはめになってしまった。あのとき、三年一組のクラスで、もっと先生の英語の授業を熱心に聞いていればよかった、とも感じる。

先日、大阪は枚方の蔦屋書店で、柴田元幸さんとトークイベントを行う機会があった。柴田さんはミルハウザーやエリクソンの翻訳を通して、わたしにアメリカ文学の魅力を、引いては現代小説の面白さを教えてくれた方である。もちろん翻訳家としてもものすごく尊敬しているから大変緊張したのだが、実のあるお話もたくさん聞くことができた。柴田さんとは去年の八月に、東京でもイベントをご一緒した。枚方のほうはわたしが聞き手となって、翻訳家を目指す若いひとたちに向けて柴田さんの話を伺うというものだったが、東京のほうはわたしの小説集『鏡のなかのアジア』の刊行記念イベントだった。この小説集にはアルファベットや英単語、ときにはチベット語なんかが、日本語と混ざり合って登場する。どうしてこんなふうなことを思いついたのかと尋ねていただいたので、翻訳しているときの頭ってこんな感じじゃないですか、と応えた。目から取り込んだ英語と、自分のなかから捻り出した日本語が、脳内でごちゃ混ぜになっている。でも完成した訳稿を見ると、そこには日本語しか書いていない。それがなんだかつまらない気がしていて、だからこういう書き方をしたのだと。すると柴田さんが、それはジュースを作るときに果物を搾って、その絞りかすを捨てるのがもったいないから、これも使ってみようというようなことですか、と言ってくくださったので、上手な表現をされるなあと思った。でもその後の言葉がさらに印象的で、柴田さんは翻訳をするとき、頭のなかに英語と日本語が混在したりはしないそうなのである。英語を取り込んだら、さっと日本語が出てくる。そのプロセスがたぶんわたしなんかの何十倍もスムーズなのだろう。だからあんなペースで訳書が出せるのだなあ、つくづくと感じ入ってしまった。きっとわたしが柴田さんの翻訳書を読むより、柴田さんが訳される速度のほうが速いに違いない。

翻訳をするのは時間がかかる。わたしよりずっと速く訳せるひとはたくさんいるのだろうと思うけれど、でもわたしも、乗って訳しはじめるとなかなか遅くはない。長篇を訳していると、だいたい中盤あたりから訳す速度が倍になる。柴田さん

の話に即せば、その作品の持っている声（ヴォイス）が纏めてくるということなのだろう。その声が魅力的であればあるほど、翻訳のやりがいはおおきくなる。いつか自分でも書いてみたい、でもいまはまだ能力が足りないような、そんな大作を訳す機会に恵まれると、苦労も多いが得るものもおおきい。その作品が書かれたプロセスを、少なくとも文章を組み立てるというレベルからは追体験することができるのだ。村上春樹が翻訳をはじめた理由として、その小説の秘密を知りたかったから、というようなことを述べているが、動機としてそれはとてもよくわかる。ジェニファー・イーガン『ならずものがやってくる』やコルソン・ホワイトヘッド『地下鉄道』なんかは、わたしにとってそんな小説だった。どちらもピュリッツァー賞受賞作だ。すごいものを訳していると、こちらの創作の勘も冴えてくる。先述した『鏡のなかのアジア』は、一見似ても似つかないけれど、じつは『ならずものがやってくる』の影響下にある。わたしの小説は人間ではなく場所が主役だが、それでも各話でその人物（場所）を変え、そして何より文体を変えつつ、ひとつのよりおおきな何かを紡ぐというアイデアを、この作品が与えてくれたのだ。

訳しているあいだは、自分の小説は書けない。翻訳もべつの世界に行くことだし、創作もやはりそうしたものである。あっちやこっちに出たり入ったり、頻繁にできるほどわたしは器用ではない。自分の創作を中断せねばならないのは、なかなかつらいし痛手でもある。けれど長い目で見れば、これらの作品を訳せたことはたいへんな財産だ。しばらく翻訳を離れていると、たちまち英語を忘れてしまう。けれど昔よりはできるようになった気がする。進んでは戻るような語学力だけれど、訳すことと書くことを、これからも続けてゆけたらと思う。

----- 著者略歴 -----

谷 崎 由 依 （たにざき ゆい）

1978年福井市生まれ。福井県立藤島高校卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程修了。2007年「舞い落ちる村」で文學界新人賞を受賞。著書に『鏡のなかのアジア』、『囚われの島』など。訳書にイーガン『ならずものがやってくる』、ブラワヨ『あたらしい名前』、ホワイトヘッド『地下鉄道』など。近畿大学文芸学部准教授。

平成30年度（第69回）芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞
